

## 奥村 多喜衛

## — ハワイ伝道に生涯を賭けた同志社人 —

中川 芙佐

(奥村多喜衛協会会長)

ホノルルには高知城がある。建立したのは高知出身の奥村多喜衛(1865—1951年)。1894(明治27)年8月、同志社神学校卒業直後に渡布し、日本(系)人の伝道、教育、社会福祉のため



奥村多喜衛

めに生涯を捧げた伝道者だ。ハワイ(1900年米国属領、1959年立州)の日本(系)人は、19世紀末から1960年代まで人種別総人口の第1位を占め、近代ハワイの建設に重要な役割を担った。奥村は彼らに「日本に誇りを持ち、ハワイ米国社会のために生きる人になれ」と声を掛け続けた。

## ● 自由民権運動

奥村多喜衛はサムライ牧師や政治家牧師と呼ばれるほど、ダイナミックな働きをした。生まれと育ちの成せる業であつ

た。土佐藩士11代目奥村又十郎の長男として生まれ、幼い頃から後藤象二郎(通信大臣、農商務大臣)や岩崎弥太郎(三菱創始者)らに接し、国士に憧れて育った。姻戚関係にある片岡健吉(衆議院議長、同志社第5代社長)からは、人格や信仰上の感化を受けた。

1879(明治12)年に入学した高知中学校の教育も、奥村の生き方に影響を与えた。

「自由は土佐の山間から生まれたと云われた様に、明治10年前後から板垣片岡などの士が立志社なる一団体

を組織し、盛んに自由民権論を主張したので、政治熱は非常に沸騰し、誰も彼も政治に嘴を容れ、街頭に客待する車夫までが政治を談ずるという有様であつた。この間に生長した余、環境の感化を受けざるを得なかつた。況やまた余が学んだ県の中学校は、政治家を養成する様に出来て居た。教科書にはスペンサー及びミルの代議政体論、ラッセルの憲法書、ギゾーの文明史などの原書が用いら

れ、訳本ではルソーの民約論などを読まされたものである」(奥村多喜衛『回顧四十年』)。

1883(明治16)年1月、高知県令による高知中学校民権派教職員全員の免職が原因で、高知初の学生運動が起こった。全学生が民権派教員を擁護し、高知城で決起集会を開いた。県令に抗議をするも、聞き入れられず、片岡健吉の次男恒次郎ら約30人が退学。奥村もその頃から欠席し始め、やがて学舎を去った。

1884(明治17)年11月、G. F. フルベッキ、タムソン、吉岡弘毅を迎えた

一方高知では、片岡健吉を始めとする多くの民権家が基督教に活路を見出し、1885年に高知教会を組織した。



奥村夫妻の銀婚式(1912年)

## ● 三大事件建白運動

1887(明治20)年秋に、自由民権運動家たちが政府に対して言論の自由、地租軽減、外交の回復を求める三大事件建白運動を始めた。全国からの参画者約600人のうち、半数以上が土佐人だった。大阪の奥村の元へも、上京途中の友人が寄り、熱心に参画を勧めた。奥村は断固断った。しかし遂にこらえきれなくなり「生還できない覚悟」で上京した。

上京後は、後藤象二郎の高輪の邸内で

後藤の『乙酉上書案』、板垣の建白書などの写しを作り、参画者に配布した。この頃の奥村は、夜は仲間と連れだって近隣の教会の礼拝を妨害し、時には無頼漢に殴打された。全くの「暴れん坊」だった。

ある日、片岡健吉が言った。「君と我とは姻戚の間柄であるが、併し真に胸襟を披いて国家の大事を語るものは、神を信ずる徒なり。君も日曜日には必ず教会に出席して基督教を学べ。一番町の教会には西森拙三氏あり島田三郎氏あり。其の他君が知り合いの同郷人多くあり」(『回顧四十年』)。意外な忠言だったが、素直に従った。不思議にも、平安な気分で礼拝を守ることができ、翌週の日曜日が待ち遠しくなった。

同年12月26日、保安条例が出され、運動参画者全員が東京三里外に追放となった。片岡は従わず投獄された。高知県関係者に対しての取り締まりは厳しく、巡查が旅館、下宿、待合、料理屋に侵入して見回り、運動に無関係な高知県人にも退去を命じた。奥村は一旦東京を出たものの、やがて舞い戻った。そして翌年1

月26日には石川島監獄の片岡健吉との面会を果し、27日には東京府庁に保安条例に関する建白書を出願した。当時の報道によると、奥村以外に片岡と面会したのは、タムソン宣教師やミロル北米聖書会社社長ら限られた人々であり、高知県人は追い返されるか、逮捕されている。多くの記録を残している奥村だが、このことについては記しておらず、如何にしてことを成しえたのか、知るすべもない。

日本人労働者の救済、教化と伝道が求められていた。

その頃の奥村は、サーゼント著「ヘンリー・マルチン小伝」を読み、ヘンリーがケンブリッジ大学卒業後に大学教授への道を捨て、印度伝道に命を捧げる姿に感動し、海外伝道の夢を抱いていたという。「ヘンリー・マルチン小伝」(丹羽清次郎訳)は、1891(明治24)年の『基督教新聞』(8月21日―10月16日(第421号―429号))に連載されており、奥村もそれを読んだと推察される。

## ●同志社時代

1892(明治25)年春にハワイから岡部次郎牧師が同志社神学校を訪れ、ハワイ伝道呼びかけた。すでにハワイ出稼ぎ日本人は2万人を越えていたが、目的の「錦衣帰国」が果たせず、低賃金で過酷な労働に疲れ、飲酒、賭博、買春にはけ口を求めるものも少なくなかった。基督教国ハワイでは、基督教を通しての

## ●19世紀末ハワイ日本人社会

上陸後、奥村は二世の少女に、「ミーマ、ハナハナ、ようこない」と話しかけ



同志社神学校時代(前列左から6人目)

られ、理解できなかった。一世に助けを求めると「ミーマ」は英語の「マイママ」、「ハナハナ」はハワイ語の仕事、「ようこない」は日本語で、「お母さんは仕事で来ることができない」と言っているのだと説明された。少女同様、多くの二世は混成語を共通語として使い、充分な日本語が話せなかった。奥村はショックを受けた。日本語教育機関が必要だと感じた。急いで寄付金を集め、1894(明治27)年に日本人幼稚園を、1896(明治29)年に日本人小学校を開設した。授業料は徴収しなかったが、小学校開設当時は保護者からの協力が得

られず、「先生がやかましいなら、学校なんかやめてしまえ」という声も聞かれた。だが、やがて家庭内の会話は確実に潤滑になり、学校教育の真価が認められた。

当時のハワイ日本人社会は「出稼ぎ気分」で旅の恥はかき捨て状態にあった。日本人男女比は4:1で、風紀は乱れていた。ダウンタウンの日本人暗黒街では、200人もの日本人売春婦が客引きをしており、伝道や矯風活動どころではなかった。男女数の不均等に原因があると考えた奥村は、秩序ある日本人社会を築くためには家庭が必要であり、そのためには自らも永住すべきだと結論付けた。そして1896(明治29)年10月に一時帰国をし、12月には妻子を連れてハワイに戻った。

## ●マキキ教会

家族を呼び寄せてからの奥村は、伝道、教育、社会事業へとさらに精力的な活動を展開する。1902(明治35)年にはダウンタウンのホノルル日本人基督教会を辞し、開発途上のマキキ地区を中心に

## 奥村多喜衛（おくむら・たきえ）

1865.4.18 ～1951.2.10

高知県安芸郡田野町で生まれる。同志社神学校を卒業した1894年ハワイ伝道に就き、伝道、教育、医療福祉、日米問題などの領域で働く。日本人慈善会副会長時代の1900年に創立した日本人慈善病院は、現在のクアキニメディカルセンター。1904年に組織したマキキ教会は、1932年に高知城を模した教会堂を建て、マキキ聖城基督教会と改名した。現在は英語部と日本語部を持つ全米最大の日系教会である。因みに、同志社大学ハワイ寮（現フレンドピースハウス）は奥村の理解者であったハワイのセオドー・リチャーズによって1936年に寄贈された。ハワイの奥村一族がハワイアンコミュニティ基金に寄贈した奥村家の旧敷地には、ハワイの低所得者のためのアパート2棟が建ち、143世帯が暮らす。

奥村は同志社を愛した。「多喜衛叔父さん」の影響で同志社で学んだ親族も少なくない。同志社ラグビー部名手だった大脇順路は甥。現在日本の奥村家当主奥村宏氏も同志社大学文学部（卒業年＝1951）出身。

開拓伝道を始めた。雨の夜の集会には、カンテラを提げて裸足で急いだ。鉄でも溶かそうというほどの熱意で取り組んだ結果、1904（明治37）年には24人の会員を得て、市内キナウ街の借家でマキキ教会を組織した。1906（明治39）年には、キナウ街に400人収容の教会堂が完成した。教会員は2年後には100人を、創立10年目に500人を超えた。マキキ教会は1929（昭和4）年の創立25周年事業として、高知城をモデルにした新しい教会堂の建設を決めた。純日本風の教会堂を建てて異彩を放ち、町に美観を添え、多くの日本人が世話になったハワイに感謝を捧げたいという奥村の願いに、教会員が賛同した結果だった。ところがハワイ伝道会社が、城は戦争の表象であると、建設に反対した。直ぐに奥村は旧約聖書の「神はわが城なり、わが避け所なり」を引用し、「元来、城は人々を保護する場所であり、日本でも基督教が伝来した時、天守閣で天主を守ったこともある。城は教会堂として相応しい」と、建設理由を説明した。この言葉にハワイ伝道会社のセオドー・リチャー

ズが納得し、賛成側に回った。リチャーズの影響でハワイ伝道会社一同が賛成を表明し、お城の教会堂建築が決まった。当時、険悪となっていたアジアの日中関係を案じた奥村は、ハワイの中国人と日本人だけでも友好関係を保ちたいと考え、建築資材を中国系のシティー・ミル社から購入した。世界大恐慌の後であり、同社は大変喜んだ。後年、マキキ教会が付属幼稚園を新築する際には、返礼としてシティー・ミル社が建物を提供した。マキキ教会は1932（昭和7）年11月「マキキ聖城基督教会堂」と改称し、記念の洗礼式では149人が洗礼を受けた。ハワイの日本人基督教会史上最多記録だった。また、当時はホノルル市内に高層ビルもなく、お城の教会がアロハタワーと並んで同市のランドマークとなった。

## ● 日系社会へ

20世紀初頭、米国本土では大量に流入する日本人に対して排日運動が激化していた。奥村は、排日運動のハワイへの飛び火を阻止するため、1920年代に

「排日予防啓発運動」を展開した。毎年数回にわたり各島を巡回し、集会を通して耕地やその周辺に暮らす日本（系）人の啓発活動や意識改革を行った。また彼らから生活問題を聞き出し、解決のため耕地会社と交渉した。徐々に日本（系）人の意識が向上し、生活や労働環境が改善された。ハワイ永住を決めた二世には、日本国籍の離脱をして米国人として歩めと勧めた。

奥村は、「排日予防啓発運動」に対する日本政府の理解を得るため、1920年と1925年に帰国した。洪澤栄一の紹介で、原敬、加藤高明、若槻禮次郎、幣原喜重郎、浜口雄幸らから協力と支援を得た。経済的には、ハワイの財閥アサトン家、クック家、キャッスル家や日本の洪澤栄一が援助を申し出た。また米国本土からはシドニー・ギュリックが応援した。「排日予防啓発運動」は1930（昭和5）年まで続いた。

1927（昭和2）年からは「日系市民会議」を主宰した。各地から選拔された二世リーダーがホノルルに集まり、ハワイの政治界や経済界の人々を講師に1

週間の研修を受けた。1941（昭和16）年まで15回の「日系市民会議」が開かれ、延べ941人の日系リーダーが日系社会に留まらず、ハワイ社会、米国社会へと巣立つて行った。

戦下にあった1942（昭和17）年10月、全ての日本（系）人が米大陸へ移送されるという噂が流れ、オアフ島の日本（系）社会は騒然となった。頼みの綱でホノルルにある日本国総領事館は、閉鎖されている。奥村は立ち上った。米軍首脳陣に面会を求め、デロス・C・エモンス司令官に真相を確かめた。ただの風評と判明した。奥村は司令官に二世の米国への忠誠心を伝え、その場を辞した。直ぐに独自の電話ネットワークで、日本（系）社会に事実を知らせた。また自ら1週間かけてオアフ島各地を回り、噂を否定した。やがて、日本（系）人の間に平安が戻った。そして米軍は本格的に二世部隊の募集を始めた。

大戦終結後の1945（昭和20）年9月には、米軍に請われ日本へ向けての「日米融和放送」を行った。「大勢のアメリカ人が実際に日本を見、また日本人に

接して正しく日本を認識し、また日本人々も明らかにアメリカを了解しますすれば、自然日米両国の融和親善ができ、両国互いに手を握り合ふ日が来ると思います。其時の1日も早からんことは私共日毎の祈禱であります。これが愈々実現した時、初めて太平洋は永久にまことの平和であります」と結んだ。

1951（昭和26）年1月、奥村の元へ、同志社創立75年記念「新島会」委員就任の依頼が届いた。しかし就任は不可能となった。2月10日に奥村は85年の人生を閉じた。半世紀以上もハワイ日本（系）社会のために活動し続けた同志社人だった。その功績に対して、1963（昭和38）年にハワイの日系社会の11団体から感謝状が届いた。

中川英佐（なががわ ふさ）  
高知大学非常勤講師 同志社女子大  
1976年卒、社会福祉学博士。著作  
『土佐からハワイへー奥村多喜衛の軌跡（奥村多喜衛とハワイ日系移民展）実行委員会 2000』。